



DVD付 デルフィニア戦記公式ガイドブック
C★NOVELS編集部 編

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の抜粋を収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▣（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▣キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

contents

目次



キャラクターとその周辺

ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン 6

リイ／グリンディエタ・ラーデン 8

イヴン 10

ナシアス 11

ノラ・バルロ 12

ドラ 13

本書は

C NOVELS 版

「放浪の戦士 デルフィニア戦記1」

「黄金の戦女神 デルフィニア戦記2」

「白亜宮の陰影 デルフィニア戦記3」

「空漠の玉座 デルフィニア戦記4」

「異郷の煌姫 デルフィニア戦記5」

中公文庫版

「デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士1～4」

「デルフィニア戦記 第II部 異郷の煌姫1」

の内容を元に構成しています。

シャーマン 14

カリン 15

フェルナン 16

ガレンス 17

ブルクス 18

ペールゼン 19

アヌア／ヘンドリック／タルボ／ルカナン 20

カーサ／アステイン／ドウルーワ・ジエンタ・ヴァン・デルフィン／ポーラ／ジル 21

ブラン／ニモ／フレッカ／サルジ／ジョゲ／ダリ／アザレイ／マイキー 22

ダール／タミュー／チフオン／サンダ／ジェナー 23

キャラクタール相関図 24

キャラクタール・地名・関連辞典 26

アベルドルン大陸中央図 30



ストーリーと記憶に残る場面

放浪の戦士 デルフィニア戦記1／デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士1 34

黄金の戦女神 デルフィニア戦記2／デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士2 39

白垂宮の陰影 デルフィニア戦記3／デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士3 45

空漠の玉座 デルフィニア戦記4／デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士4 51

異郷の煌姫 デルフィニア戦記5／デルフィニア戦記 第II部 異郷の煌姫1 56

エピソードと記憶に残る台詞

「王」になりたくなかった男の運命 58
孤独の場所 1〜4 / 疾走する馬よりも速く / 人ではない「何か」 / 心で受けとめた 1〜2 / 逆説の論理 / 誰がおまえを遣わした? / 希望の構築

異世界に送り込まれた「少年」の運命 62

人間ではないモノ 1〜2 / 際立つ異端 1〜2 / 孤独の場所 / 当てにすると逃げて行く / 生きるための / どちらなのか / 興味があるのは

おみやげ 66 ナシアスへの意外な贈りもの / まさかの將軍

詐欺——正直も時には困る 68

どうだろうか? 69

獅子には化ける 70

フェルナン伯爵の告白 71

その記憶は痛みをとまなう / リイのやさしさ 72
振り返る / 見覚えのある背中 / 前を向いて

カリン女官長の二十四年 74

おまえがおまえである限り 75

さようならを伝えて 76

書きおろし小説 王女誕生までの七日間 デルフィニア戦記外伝 茅田砂胡 イラスト・沖麻実也 77

舞台化記念特別鼎談 なぜ『デルフィニア戦記』だったのか? 108
藤野友也 / 佃井皆美 / 茅田砂胡

・刊行書籍案内 122
・茅田砂胡プロジェクト案内 126

ウォル・グreek・ロウ・デルフィン

大華三国の一であるデルフィニアの国王。先代国王ドゥルーフと愛妾ポーラとの間に生まれた庶子。王宮から遠く離れた北部のスーシャでフェルナン伯爵によって育てられた。素朴でおおらかな性格でありながら屈指の剣豪であり、政治手腕も確かなものがある。パールゼン侯爵の陰謀により王座を追われ単独で国外へ脱出したが、放浪中に凄まじい剣技と身体能力を有するリィと名乗る少女と出逢ったことから運命が変わっていく。



コラルへ戻ってあなたの主人に伝えなさい。
スーシャの小せがれは

王座も王冠も望んではないいと。
ただ、父の仇を討ちたい一心で
ここまでやってくるだろうとな。

その強さこそが未来を築く



放浪の戦士 デルフィニア戦記1

デルフィニア戦記 第一部 放浪の戦士1

男は絶体絶命の危機に陥っていた。十五人を超す敵に追われて、五人までは返り討ちにしたものの、まだ十本もの抜き身の剣に囲まれている。ここまでかと絶望しながらも一人でも多くを道連れにせんと覚悟を決めたその時——目前の花畑から十二、三歳ほどの少年がむっくりと起きあがったのだ。刺客は目撃者ともども始末するつもりで少年に襲いかかり、眠りこけていたらしい少年が驚きで固まる。男は悲痛の叫びをあげたが、少年は華奢な見かけによらず、らくらくと長剣を振るい、あっさり刺客を斬り捨てて、男に助力を申し出るのであった。

年齢にそぐわぬ伎倆で男と共闘し撃退した少年は、実は少女であった。しかも異世界からの迷子だと言う。リイと名乗り、煌めく黄金のような髪と深い緑の宝石のような瞳を持つ美少女でありながら、馬よりも速く走る足と、大の男を片手で持ち上げるほどの臂力の持ち主だった。

一方、ウォルと名乗った男は中央を三分する大国デルフィニアの国王だった。しかし、今はその地位を追われており、刺客に狙われていると告白する。

二人は意気投合し、共にデルフィニアの首都コーラルを目

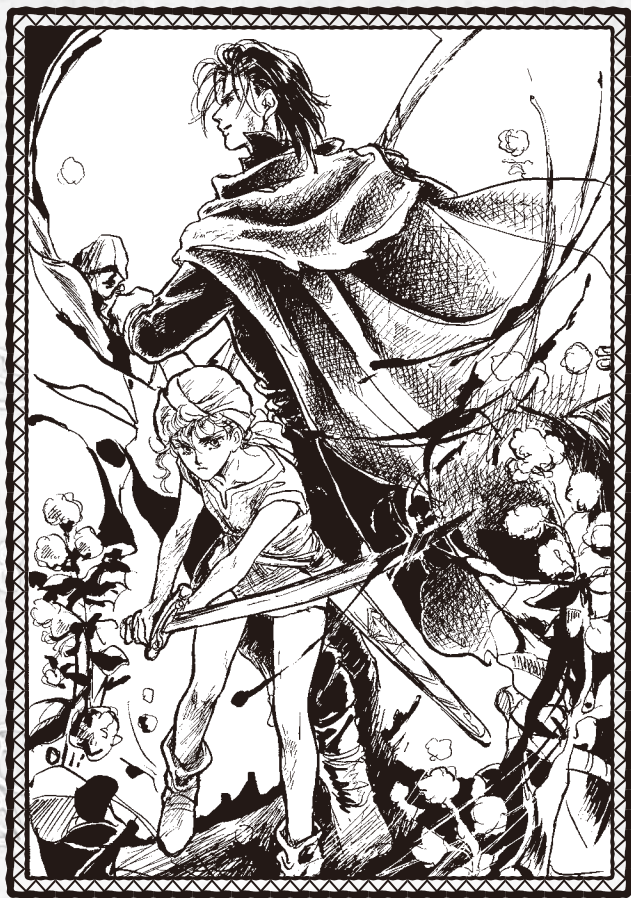
指すこととなる。

デルフィニアの先代国王ドウルーフは偉大な国王として国民から慕われていた。王の死後、四人の王子王女が残されたが、四人とも三年の間に次々と不慮の死を遂げ、最後の王女の死から二年間、次期国王の選定は混迷を極めた。この歳月を人々は「魔の五年間」と呼んで恐れた。国王不在期において他国の介入を防ぎ、デルフィニアの国難を乗り切った功労者がパールゼン侯爵である。侯爵は宰相となり、事実上デルフィニアの権力の中枢に身を置いた。

先王の甥で騎士としても名高いサヴォア公爵バルロが国王に推され、後継者問題に決着がつくかと思われた時、北部のスーシャの領主フェルナン伯爵が先王の妾腹の息子をつれて王宮に現れる。大紛糾の末、この息子ことウォルは国王の座についた。

善政を敷き、民からも支持されていたウォルだが、半年前、突然先王の王子王女を暗殺した疑いをかけられ追放される。さらには次々と暗殺の使者が差し向けられたが、これを撃退、隣国パラストの西部で多勢に囲まれた時にリイと出逢ったのである。

自由戦士として放浪の旅を続けていたウォルだがパールゼン侯爵の独裁と数少なかつた己の味方への圧制の噂に心を痛めていた。そんな中、養父であるフェルナン伯爵が投獄され



すけだち
「助太刀するぜ」
「ご助勢、感謝する！」

けんげき
剣戟の最中の出逢い。

見ず知らずの二人が、圧倒的な身長差をものともせず^{ふる}に背中を預け剣を揮う。
一面の花畑に鮮血が飛ぶ。

たことを知り、リイと共に伯爵救出の意思を新たにする。

途中、パラスト領内で二人はデルフィニア貴族ダール卿の使いとの出会い、その案内でダール卿の所領であるウインザに入った。だがダール卿の目的はウォルに「不名誉な死」をもたらし、戴冠を拒むバルロを王位につかせることだった。城もろともウォルを焼死させようと火の手があがる中、リイは人間には不可能な高さの最上階から階下に飛び降り、さらに同じように飛び降りてくるウォルを受け止める離れ技を演ずる。さらには月もない暗夜の森をウォルを背負って疾走し、ついに安全圏に逃れた。これには常人離れした度量の広さを持つウォルも、さすがに背筋に冷たいものを感じざるを得なかった。

硬い顔でリイは問う。「お前もおれを化け物と呼ぶのか」

ウォルは答える。「お前の容姿は女ならば誰であらうと望むものだし、その足と剣の腕前は男の誰もが切望するものだ。それほどの贈り物を与えられながら感謝もせず呪いの言葉を吐きちらすなど贅沢というものだぞ」

リイは掴み所のないこの男を面白がり、ウォルに王冠をかぶせてみたくなったと笑うのだった。

ウォルは「間違いなく味方と言いきれる戦力」を求めて、ビルグナ砦に向かった。この砦を守るのはラモナ騎士団。デルフィニアでも屈指の戦力のひとつであり、団長のナシアスはバルロの親友でもある。

砦では誰しもがウォルの帰還を涙ぐまばかりに喜び迎えた。王を王とも思わないリイの態度や口の利きようが問題になるが、副団長のガレンスとの腕試しに完勝するに至り軍神バルドウの娘として受け入れられ、美技と謳われるナシアスの剣技すら獣のような素早い動きで押さえ込み、騎士団員から勝利の女神としての尊敬を勝ちとるのであった。

ウォルとリイは目立たぬように二人だけで砦を後にする。コーラルに囚われた味方を救出するために。

コーラル城ではベールゼン侯爵を首魁とする改革派の面々がウォル帰還の知らせに会合を開いている。この席で国王派であるドラ將軍の派遣を決議。味方同士で対立させようと図り、將軍の娘のシャーミアンを人質として王宮に留め置き、娘の身柄を盾に將軍を脅して出撃させる。ドラ將軍はシャーミアンに何事かを言い含めた上で出立する。

一方、バルロは事実上の国王代行を嫌々ながらも務めていた。ドラ將軍もシャーミアンも親友のナシアスさえも真の国王の元に集結しつつある。比べて軟禁状態におかれた己の身の不遇に怒りを覚えながら、サヴォア家執事のカーサを相手にばやきつつ不屈の闘志を静かに燃やす。

そしてシャーミアンは改革派のタミュー男爵の子息チフォンの策略の裏をかくて、見事コーラルを脱出し、父親との合流を果たすのだった。

「おまえもおれを化け物と呼ぶのか」

男は慌てて首を振る。

「違う。ただ……その、おまえのいたところでは、そこに生きる人は皆、おまえのような生き物かと思っただけだ……」

「だったら化け物呼ばわりなんかされない」

「……………」

「おれはどこにいても『異常』だった。この見た目の他はなにかもだ。自分でそう言ってるのに人間ときたら、男も女も大人も子どもも、おれの外見だけを見て喜んで、ちやほやもてはやして触りたがる。そのくせ、ちらりとでもおれが自分らしく振る舞おうものなら、とたんに掌を返して化け物の大合唱だ。それなら初めから近づいて来なければいい」

「……………」

「おれは、おれだ。どんなに異様に見えようと、こういう生き物だ。それがどうしてそんなにいけない？」

男は、少女が泣くのではないかと思った。

憤然とした怒りに満ちた口調なのだが、その裏に何ともやりきれない悔しさと悲しみを感じたような、気がしたのだ。

「リイ……。グリンダ。おまえには一人の味方もいなかったのか？」

「……………」

「皆がみんな、おまえを化け物と呼んだのか？ 本当に、一人残らず？」

大きく揺らいた少女の表情に、男は質問の答えが『否』であることを知った。

「それならそう、すねたり悲しんだりするな。確かにおまえは、尋常の人ではあるまい。俺も、おまえが当たり前の少女であるとは思わない。だがな。おまえのそ

の顔と姿は、女ならば誰であろうと心底から望むものだし、その足と剣の腕前は、男の誰もが切望するものだ。それほどの贈り物を次々と与えられているながら、ヤーニスに感謝も贈らず、呪いの言葉を吐きちらすなど、贅沢（ぜいたく）というものだぞ」

恐ろしくきつぱりと言いきられて、少女は大きく瞳を見開いた。

「おまえ……、ほんとに変なやつだな」

「おまえに言われたくはない。第一、これで三度目だ」

少女はくすりと表情を緩めた。

男もにやりと笑いかけたが、すぐに顔を引き締めた。真顔で言う。

「確かに……おまえのことを少しも恐ろしくないと言ったら嘘（うそ）になってしまうだろう。スーシャでもコーラルでも、おそらく他のどんな土地でも、おまえのような生き物のことは聞いたことがない。向かいあっている相手の正体がわからないということは、リイ。想像以上に恐ろしいことだぞ」

「……………」

「だが、しかしだ。おまえは俺の命を救ってくれた。何度もだ。特に今は、おまえがいなければ、俺はまさしくあの燃えおちる城に取り残され、ここでこうして話していることもできなかったはずだ。たとえおまえが何であろうと、その恩を忘れ、命の恩人を化け物呼ばわりするほど、俺は恥知らずではないつもりだ」

「……………」

「信じられないなら誓（ちか）つてもいい。決しておまえを化け物とは言わない」

すると、少女がすぐさま言ったものだ。

「うかつにそんなことは誓わないほうがいい」

「いや、しかし……」

「誓いはいらぬ。そう言ってくれるだけで充分だ」

国王の劇的な王座奪還からまもなく。

さらなる激震がコーラル城を襲った。

こともあろうに、国王が「養女を取る」と言い出したのだ。血のつながらない娘を、このデルフィニアの王女にすると言うのである。無論、前例のないことだ。

しかも、多少なりとも王家に連なる血筋の娘ならまだしも、デルフィニア人でもない。生まれも素性もわからない。

城内は大混乱に陥った。

陛下は何を血迷ったのかと嘆く声が多かったのは当然だ。

ただ、意外にも、国王のこの爆弾発言に賛同——とまでは言わないにしても、容認する人も少なくなかったのだ。

その筆頭が女官長のカリンである。

今このコーラル城に住む王族の女性はいない。

部下の侍女にあれこれと指示を出し、一室を整えさせて、

山賊のような身なりの少女に丁寧^{ていねい}に話しかけた。

「奥棟にお部屋をご用意致しました」

「え？」

少女はこの時まで本宮の中で寝起きたことはない。

暖かい季節でもあるので、山の中で野宿していた。食事も同様で、本宮の壮麗な食堂^{そうれい}に顔を出したことは一度もない。

何しろ人の多いコーラル城だから、二の郭^{かく}にも三の郭にも

食べ物を出す場所には事欠かない。

三の郭のラモナ騎士団の官舎に混ぜてもらったり、一般の兵士たちの食堂^{まき}に紛れ込んだりしていたらしい。

黄金の髪を隠してしまうと、少女は小者のように見える。

ただ、腰の大剣が小者の身分には不相応だが、これも布でくるんで背中に負い、目立たないようにしているらしい。

そうした事情を、カリンは部下の侍女から耳にしていた。

今まではかまわずにいたのだが、国王が「養女にする」と宣言をした以上、さっそくこの少女に対する扱いをあらためなくてはと思ったようだった。

「デルフィニアの王女となる方に野宿などさせられません。

——どうぞ、こちらへ」

少女はどうにも釈然としない顔だったが、肩をすくめて、おとなしくカリンについて行った。

城内を好き勝手に歩き回っている少女も、奥棟へ入るのはこれが初めてだ。

どこの国の城にも言えることだが、表部分は男たちが働く施政の場であり、来客を迎える公式の場だ。対して奥向きは王妃やその子どもたちが暮らす国王の私的な住居である。

少女は廊下を歩きながら、珍しそくに辺り^{あた}を見渡していた。

表部分とはかなり雰囲気が違う。

コーラル城は、少女がこの世界で見てきたどの建物よりも立派な建物だった。

特に表部分は、堂々たる風格を感じさせる壮麗な宮殿だが、この辺りにくると、豪華さは同じでも、柱のつくりや天井の装飾にずいぶん優しい意匠が使われている。

女官長は一室の前で足を止めた。

「こちらでございます」

そこには二人の侍女が控えていて、少女のためにわざわざ扉を開けてくれた。中はいくつかの部屋に別れていた。広い居間と小さな部屋、それから寝室である。

居間の床は寄せ木細工で、その上に鮮やかな絨毯が敷かれ、壁紙は小花模様、赤と金の絹地を張った肘掛け椅子、優美な曲線を描く飾り棚や螺鈿の机などが置かれている。

小さいほうの部屋は明かり取りの窓が大きく取ってあり、立派なつやつやとした書き物机と、書物を置く読書台があった。最後の寝室を覗くと、これまた可愛らしい部屋だった。

青地に金の星を散らした壁紙、分厚く織られた絨毯の上に置かれた寝台は天蓋付きで、白い薄衣が垂れている。

ふかふかの寝台を何とも言えない顔で見つめ、少女は深いため息を吐いた。

「ここで、寝るの？　ぼくが？」

「姫さまのお住まいともなれば、当然でございます」

少女は怒るより呆れるより、困惑を隠せないでいた。

知りあってからほんの十日あまりに過ぎないが、カリンは最初から素性の知れない自分を妙に尊重して、敬意を払って

くれていたように思う。

それにしても、早くも『姫さま』と呼んでくることに驚き、その困惑と疑問を素直に女官長にぶつけてみた。

「ウォルの言ったこと、本気にしてるの？」

「陛下は冗談でこのようなことを言い出される方ではございません」

少女はものすごく疑わしげな顔になった。

(どこからどう聞いても冗談にしか聞こえない……)

と、その顔は訴えている。

「おまえを俺の養女にする」という男の発言には仰天した。言った本人はまだ二十四歳の若者で、妻もいないとなれば「ふざけてるのか？」と言われて当然の状況である。

それ以前に、その男が『国王』という肩書きを持っていることが大問題だった。

少女は人の社会の理や掟にはまったく言っていないほど無頓着で、規律に縛られる気もなかったが、そんな彼女にも、国王というものは、多少は(あくまで多少ではあるが)特別に扱われて然るべき存在ではないかという意識くらいはある。

第一、王女というものは(普通は)国王の实の娘でなければならぬはずだという知識もある。

嘆かわしげに金の頭を振って、寝室から居間に戻ったが、少女は室内に腰を下ろそうとはせずに言った。

「そんなに簡単に認めていいことじゃないと思うよ。ぼくは

なぜ『デルフィニア戦記』だったのか？

きっかけは田舎暮らしと三年前

司会 茅田先生は、今日初めて私たちが惚れ込んでぜひにとお願いしました主役のお二人とお会いしたわけですが、このツーショットをご覧になって、第一印象いかがですか？

茅田 蕨野さんは、まさに、もう王様がいる、ウォルがここにいて、という感じですよ。

蕨野 恐縮です。

茅田 佃井さんは、ブログ（注1）読ませていただきまして、三年前から、『デルフィニア戦記』を読んでいたさっているとのこと。勝った！と思います（笑）。実は、私は佃

井さんをもっと前から知ってるんです。四年前に「タイガー&バニー」

（注2）の舞台でドラゴンキッド（注3）という、カンフーマスターの役で出でらしたのを見まして、この人は、本当によく動ける方だと思っただけです。ラストのシーンなんか、元気で、可愛くて。思い切り拍手したのを覚えています。今回、役者さんの候補を訊かれたとき、真っ先に頭に浮かんでお伝えしたんです。本当にその通りになってびっくりしています。

佃井 本当ですか？ 嬉しい！ ありがとうございます。

茅田 実際お会いしてみると本当に可愛い方なので、あの猛々しい役で



蕨野 友也
佃井 皆美
茅田 砂胡

【司会】
安藤 岳（東映ビデオ）

よいのかな、と思いますけど（笑）。
司会 お二人から今回の役を引き受けた理由、きっかけをお話してください。

蕨野 僕は一年半以上、仮面ライダー（注4）で、王を、といつても悪役のほうの王なんですけど、演じてきまして。撮影が終わった後、マネージャーから、次にこれはどうだろうと勧められたんです。「私も読んだんだけど、この主人公の台詞が蕨野の台詞にしか聞こえない」と。「それなんですか？」って聞いたんですけど、「もうほとんど一緒だ」って言うんです。親のことで怒ったり、いつもまっすぐだったりと。読ませていただいたて確かにそうだな、八〇九

（注1）佃井皆美オフィシャルブログ「H.B.D」のこと。http://ameblo.jp/minami-tsukui/ （注2）サンライズ制作による2011年4月より放映開始のテレビアニメ。複数のコミカライズや、劇場版映画の公開など、多メディアで展開された。舞台とは2012年に「TIGER & BUNNY THE LIVE」と題し、お台場のダイバーシティ東京 プラザにあるZepp Diver City (TOKYO)での公演を指す。



割はウォルと僕とは同じだな、と。あとの一―二割の違うところをどうしようかと、でも読み終わってそれは気持ちで乗り切ろう、乗り切れると自信ができたことで、やってみたい、という気持ちができきました。

茅田 嬉しいですね。同じところ、違うところはそれぞれなどところですか？

藤野 僕は九州の人間（注5）なので、人情、友情に関しては人一倍うるさくて、ですね。

一同 笑。

藤野 リイがナシアスとバルロの喧嘩（注6）を止めて、友だち同士なのに、なぜ喧嘩するのかと。そこは、僕が読んでてもやはりそう思うところですね。ところが、絶対的にそうではなくてはならない状況であつてもリイは許さない。互いに背負っているものがあつて、その状況になつていのに、リイは絶対それを止めるじ

やないですか。ウォルも気持ちはそうだと思うんです。

茅田 そうですね、真つ正面から止めるのがリイなら、王様は表面に出さないで止める、みたいなところがありますね。

藤野 ウォルはそうですね。自分は状況によって変えてしまうけれど、ウォルは人に見せなくても決めていることがしっかりある。格好いいなと思いついて、そこが一番自分とは違うと感じました。ファンの方にとつてもそこは大事なところだと思うので、それを裏切らないように、こいつじゃねえだろと思われるようにと思つています。気持ち勝負で戦わなければならないと。

茅田 自分の描いたキャラクターを生身の人間が演じてくださるというのはめったにない体験なので、気持ちに通じると言っていたいただいて本当にありがたいです。

（注3）作中のヒーローの一人ホアン・パオリンのこと。雷を操り、電撃を乗せて攻撃を放つ「稲妻カンフーマスター」。幼少時から格闘技の英才教育を受けたボーイッシュな少女。（注4）2014年10月から15年9月まで放映された『仮面ライダードライブ』のこと。敵の幹部、ハート・ロイミュードを熱演。主演作となる『仮面ライダーハート』がVシネマ『ドライブサーガ 仮面ライダーマッハ／仮面ライダーハート』として2016年11月に発売。（注5）出身は宮崎県都城市。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。